

第 1 回 全国こども科学映像祭 表彰式と上映会



別所哲也氏

受賞した中学生の眼が、一瞬きらりと輝いた。特別講演をした俳優の別所哲也さんが「ルーカスやスピルバーグも、スタートは皆さんと同じようなショートフィルムからだったのですよ。」と話した時のことである。君たちの中からも、将来、大監督が誕生するかも知れないね、期待してますよ。」と話を締めた。

1月18日、東京・お台場の日本科学未来館で、第1回全国こども科学映像祭の表彰式と上映会が行われた時の一コマである。

世界で初めてといわれる小学生・中学生が制作したサイエンスビデオのコンクールの始まりである。特に小学生部門は、親と子、祖父母と孫といったコンビで制作した作品を募集するという前代未聞の試みであった。



「森は生きている」

数年前から、デジタルのビデオカメラの普及が目ざましく、小・中学校でも、文化祭や修学旅行のビデオでの記録は日常になりつつある。そろそろ子ども対象の映像祭があっても良いのではないだろうかと考えていた。

さらには、さまざまに喧伝されている“若者の理科離れ”ということであるが、果たして事実はどうなのか。

この映像祭を主催した日本科学映像協会、科学技術振興事業団、ニューテクノロジー振興財団は、敢えて“理科離れ”といわれている子どもたちに、自主的な映像制作を提案し

たのである。

3分から10分という短いビデオ作品の募集であったが、子どもたちにとっては適当な長さであったに違いない。

この映像祭では、珍しく作品募集にあたって、テーマの設定を行った。小学生部門で「身近な生きもののふしぎ」、中学生部門は「誕生」ということであった。ちょうどこのテーマ設定のころ、毛利衛宇宙飛行士とお話する機会があったが、毛利さんいわく、物事を単に記録するというだけでなく、そこにどんな“ふしぎ”があるのかを見極めることが想像力をかきたて、クリエイティブな能力を引き出すことにつながっていくのではないかと、という示唆に富んだ話をされ、意を強くしたのである。

審査は、さまざまな意味で慎重を極めた。

小学生部門で、共同作業をする父母や祖父母には、映像制作に手馴れた人が多いのである。こどもとの共同作業にどこまでウエイトを置けばよいか、小学生たちの小学生らしさをどのように評価するのか、議論続出であった。

「Happy Birth
めだかちゃん」

応募作品22、その上映時間2時間30分。その中から文部科学大臣賞2作品（各部門1作品）、優秀作品5本、そして佳作5本が選

ばれた。

表彰式は、柴田治呂運営委員長の挨拶にはじまり、中村雅哉運営委員の挨拶、そして遠山文部科学大臣の祝辞（林幸秀科学技術・学術政策局長代読）へと続いた後、入賞作品の表彰に入る。小学生部門は、親子または祖父母と孫という組み合わせの受賞で、場内いっぱい微笑ましが充満した。

「守れ！
カワバタモロコ」

朝日新聞科学医療部の柏原審査員の審査講評は詳細に亘り、子どもたちはひとつひとつうなずきながら聞き入っていた。

文部科学大臣賞の「七重のトビハゼ観察記（小学生部門）」は、東京湾の干潟の自然を、おじいちゃんと孫娘が丹念に記録した作品で、昭和初期の名作「ある日の干潟」を連想させるという審査員もいた程の出来栄であった。

中学生部門の文部科学大臣賞「守れ！カワバタモロコ～産卵と誕生の奇跡～」は、自分たちのまわりに生息する身近な生きものの絶滅からの保護を訴えた作品で、中学生たちの素朴な活動記録が強い訴求力を感じさせるものであった。

優秀作品の中では、「Happy Birth めだかちゃん」（中学生部門）は探究心を強く感じ、テーマの捉え方にもユーモアもあり、不思議な魅力であきさせない作品になっていた。「セ

ミの脱皮」（中学生部門）は、ひとりで丁寧に撮影を行っており、プロでも難しいセミの脱皮の記録を完成させている。



「セミの脱皮」

小学生部門の優秀作品賞「カメくんのコウラと成長」には、科学に詳しい審査員たちにも新鮮な驚きを与えてくれる珍しい内容を伝えてくれた。同じく「こんちゅうだいすき」は、祖父と一年生の男の子の作品だが、一年生とはいっても、本当に昆虫大好きということが画面から自然に伝わってくるので、一年生出演だが選ばれた。「さぬきのウドンゲ～クサカゲロウの不思議～」は、発想がユニークで楽しめる作品になっていた。

佳作は小学生、中学生部門で計5作品が選ばれた。特に中学生部門の「掃きだめから鶴」はリサイクルの進めという意図が強く感じられ、「霜柱の誕生」は中学生理科班の自主的な実験の姿がうまくまとめられており、また、「413年目の誕生」という作品は、他の作品とテーマが多少異なっていたが、広い意味で“祭り”というのは民俗学の話なので、科学映像祭のねらいのひとつだということも評価され、選ばれた。受賞作品は、それぞれにアイデアと楽しさを感じさせる作品になっており、バラエティに富んだ映像祭として、第1回目の祭典は無事幕を閉じたのである。



「413年目の誕生」